

第5群 妊娠中毒症後遺症とその周辺

65. 妊娠中毒症後遺症の予後——特に腎を中心として

(熊本大) 中山 道男, 瀬戸 致行

晩期妊娠中毒症では混合中毒症からは勿論、臨床的に純粋型と診断したものからも蛋白尿、高血圧などの腎・血管系後遺症を高頻度に残すので、本症の場合主要な病変のみられる腎を中心とした後遺症の予後を検討した。

研究対象としては分娩後治療を行なわなかつた 103 例の後遺症患者及び後遺症を長期間管理し且つその後再妊娠した10例をとり上げた。

103例の後遺症患者について後遺症症状の推移を観察してみると、純粋型では49例中35例(71.4%)が分娩後1年未満で症状が軽快または消失しているのに対し、混合型のあとにみる後遺症すなわち蛋白尿や高血圧(厳密には多くは初めから存在した病変による症状であろう)は、さらに長期間遺残する。

この様な長期症状を残した症例の中、18例を入院させ諸種の検査を行つてみると、Fishberg 尿濃縮試験、P S P排泄試験などの簡単な腎機能検査ではいずれもほとんど正常値を示しているにもかかわらず、腎生検をも合せ行つた7例では腎糸球体や腎細小動脈には予想以上に高度の病変を認めた。

さらに前回妊娠中毒症で且後遺症を残した症例の中、その後再び妊娠した10例についての詳細な検討を加えてみると、分娩から次回妊娠までに後遺症症状の消失した4例では、3例が次目妊娠に全く中毒症症状をみず、残り1例も軽症中毒症で児の発育も良好であつた。しかし妊娠直前で後遺症症状の消失をみなかつた4例では、次回妊娠では早期から発病悪化し、中2例は妊娠中絶の止むなきに至つた。すなわち後遺症の予後は妊娠中の中毒症病型、重さ、治療などに左右されることは勿論であるが、分娩後早期に且根気よく治療して行くとも臨床的治癒の状態まで持つて行くべきであり、この事は次回妊娠に対する中毒症予防の点からもきわめて大切である。

質問 (東京大) 小林 隆

妊娠中毒症の後遺症の定義をよく考えてみると私にははつきりしないので、その点をお尋ねします。

純型中毒症の後遺症の概念または定義は自から明らかです。

ところが、混合型中毒症で後遺症という場合は何を指しているのでしょうか。後遺症をどうして分離または

identify するのでしょうか。

質問

(東京大) 田中 敏晴

既往歴に腎炎など全くない症例—最後から2番目の例—この様な症例は腎生検で混合型とされることはあります。後遺症遺残を論ずるに、妊娠中の経過をみて、全く純型と同様の経過を辿つても腎生検で明らかな慢性腎炎の症例のあることを経験しますが、—この症例は慢性腎炎の症例ではないでしょうか。

答弁

(熊本大) 中山 道男

1) 臨床的に判然と妊娠前に腎—血管系既往症の分つているものは混合型と診断しており、既往症の判然しない症例に就ては腎生検所見から組織学的に我々の分類している腎病変のカテゴリーにしたがつて決めています。

質問

(東京医大) 高橋 禎昌

後遺症に対して分娩直後より早期、かつ Energisch な治療を開始し継続しなければならぬと云う御見解に対しては賛意を表するものであるが、その際演者が示した細尿管性利尿降圧剤副腎皮質ホルモン、キドラなどの使用量及び期間について何か型のごときものを御教示願えませんか。

答弁

(熊本大) 中山 道男

妊娠中における副腎皮質ホルモンの使用量は胎児に対する影響を考慮して4mg位から漸減的に向つている。産褥期の後遺症遺残の症例には8mg、10mgの可成り大量から使用する要があり、2〜3カ月で症状消失した症例を経験している Systematic な治療方法を今後検討して行きたいと思ひます。

答弁・追加

(熊本大) 中山 道男

私共の教室でも産褥1カ月に収縮期140以上、または拡張期90以上の高血圧を呈した32例の症例を経験しています。この内、既往症に腎—血管系疾患がなく、また妊娠中も全く中毒症症状の発現をみなかつた15例のみを取上げて、高血圧の推移をみてみますと、全例、全然治療を加えることなく、分娩後4カ月以内に血圧は正常値に回復しており、その後は極めて良好であるという結果を得ています。なお興味あることはこの15例中10例は明かに父母系の何れかに高血圧を有するいわゆる高血圧症家系の症例でありました。

66. 妊娠中毒症後遺症と網膜血管径の変動に関する研究